

「茶室だより」 No.03

「清心庵」茶室披きと「宮橋杯」・「荒巻杯」

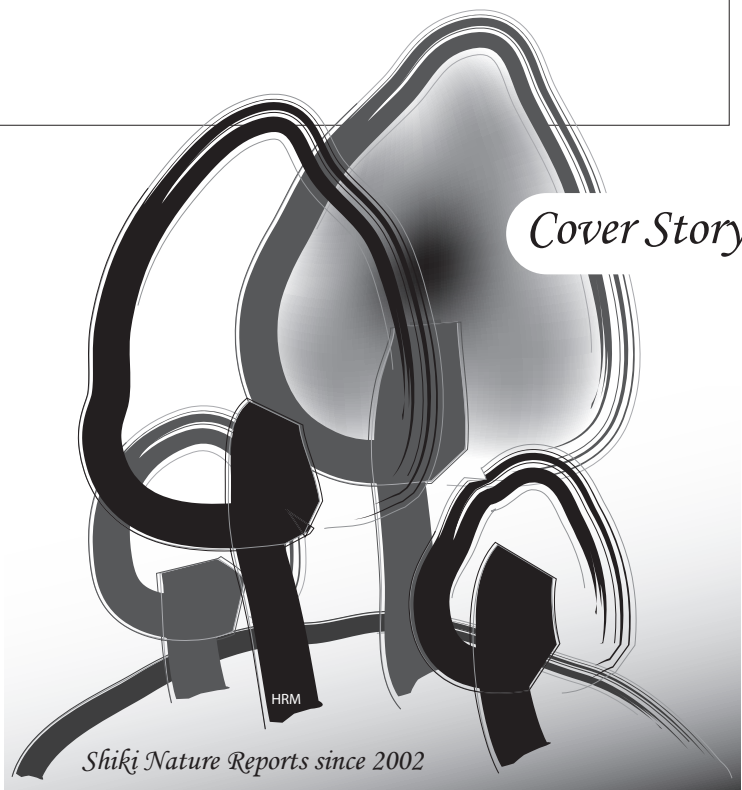
今年度運用を開始した光彩館「和室」は、裏千家茶道の規矩に基づいて設計されていますが、このたび茶道裏千家のご承認のもと、昨年9月5日（木）、坐忘斎千宗室家元（第16代）より「清心庵」の庵号と直筆の扁額を賜りました。これを記念して、10月19日（土）には、扁額ご寄贈に尽力くださった大谷 裕巳様

（裏千家・塾員）・菅沼安嬉子様（慶應連合三田会前会長）・遠藤 彬様（本校12期）をはじめ、時を同じくしてご愛蔵の茶道具を一括してご寄贈くださった岡田 征子様・岡田 英史様

（常任理事・本校32期）、山下 宗枝先生（裏千家教授）、高橋 美樹前校長・岡本 真治前事務長ほかの来賓をお迎えして、内々ながら扁額披露を含む茶室披きを行いました。幸いにも天気にも恵まれた当日午後1時30分からの式では、中島事務長による司会のもと、1階セミナールーム2での河野校長による挨拶、大谷様からのご祝辞、目録贈呈に続き、場所を和室「清心庵」に移して扁額除幕・呈茶を行いました（床の間には 扁額と共に頂戴した「清心庵」の軸を掛け、岡田様・菅沼様ご寄贈の茶道具も 早速使用しました）、その際には、「社会C」履修者有志諸君11名が受付や誘導、呈茶（＝薄茶点前[風炉]の披露とお客様への点出し）を手伝ってくれたことを特記します（金曜クラスの履修者諸君は前日の会場設営も手伝ってくれました。いづれもありがとうございます！）。皆様とともに清心庵の完成を祝えたこと、嬉しく思います。

他方、「社会C」の授業では、前回紹介した盆略点前に続き、9月からは初めて薄茶点前[風炉]に挑戦し、柄杓の扱いや席入りなど、亭主・客それぞれの作法を学びました（以前の去来舎和室での授業[～22年]では、設備の都合から、実習は盆略点前で終わっていました）。12月には豪州・Toowoomba Grammar Schoolの留学生2名が来校し、3週にわたり金曜クラスで茶の湯や変体仮名の世界に触れましたが、履修者諸君にとっても、これまでの実習の成果を披露する格好の機会となったようです。また、荒巻さん（理科助手）のご協力のもと、月曜クラスは10月、金曜クラスは12月に、各クラス4班に分かれて校内で季節の花を探し、花入に入れる体験も初めて試みました〔“花は野にあるように”（「利休七則」）を標榜する茶の湯の世界では、花は「生ける」でなく「入れる」と表現します〕。校内の豊かな自然環境を存分に活用しながら、型にとらわれずゲーム性を持たせて茶花に親しんでもらおうと、各クラスで「荒巻杯」＝優勝班を決め、宮橋先生（理科）も巻き込んで、「宮橋杯」＝総合優勝も決めていただいたところです（宮橋先生・荒巻さん、無茶振りをしてすみませんでした！）。両クラスとも、各班のメンバーが試行錯誤を重ねながら協力して取り組む姿が印象的でした。これを期に茶の湯の世界や日本文化にさらに興味を持ってもらえたらと願っています。

さて、来年度は「社会A」に移動して開講予定です。履修予定の諸君、4月に清心庵でお会いしましょう！



茶室披き 1
一点前を披露する日下部君一



茶室披き 2
一來賓をもてなす志木高生一



「宮橋杯」受賞作
（月曜クラス）



荒巻さんと金曜クラスの諸君
（Ikeda）

最近「秋が短くなった。」とよく耳にします。たしかに2024年は6月から真夏日（最高気温が30℃以上）が続き、10月まで台風が日本に接近しました。そういう意味では蒸し暑い日が3か月以上も続き、「夏」をどうとらえるかにもよりますが、長い夏だと感じた人も多かったかもしれません。ただ、その後は大陸から乾いた空気が移動性高気圧とともにやってきて、秋晴れの日も多かったですし、12月に入ると大陸の高気圧から冷たい北風が吹いて日本海側では大雪、太平洋側では厳しい冷え込みとなっています。

図はさいたま市にあるアメダスの気温データから1978年以降（開設は1976年）の年平均気温と、各年の最高気温、最低気温を示します。気温の経年変化は着実に上昇しています。全地球平均（約0.7℃/100年、近年は0.2～0.3℃/10年と言われる）より速いペースです。最高気温も近年は37℃以上が連続しています。一方、最低気温はばらつきがありますが横ばい傾向です。なお、2018年の-9.8℃はさいたま市の観測史上最低気温です。この年は最高気温も39.3℃を記録し、夏と冬の気温差が最も大きい年でした。さいたまの夏は着実に暑くなっています。

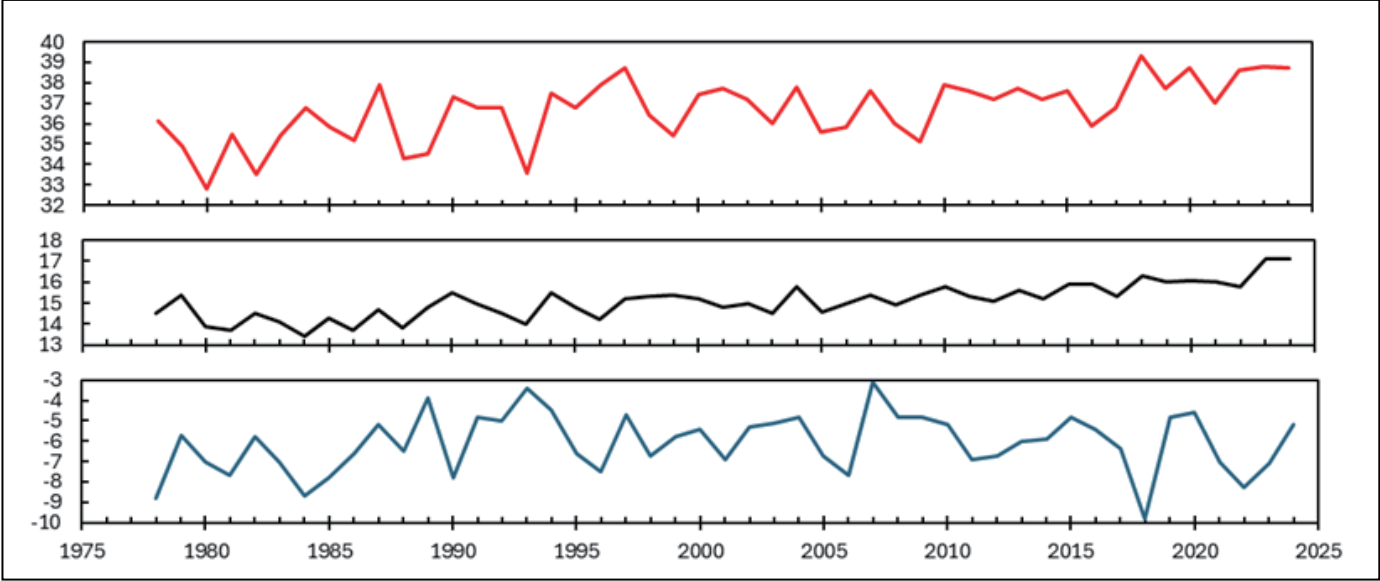


図 アメダス「さいたま」の1978年～2024年の（上）最高気温、（中）平均気温、（下）最低気温

(Higuchi)

【お香と植物⑥】
古典の授業でお香づくり

Incense

2年古典探究（井之浦担当クラス）では、昨年12月にお香調合の実習授業を行いました。
古典とお香調合にはどんなつながりがあるのでしょうか？
お香が日本に入ってきた当初は、魔除けや供養の意味合いで用いることが多かったのですが、後に趣味として楽しむようになり、複数の香料を自分好みに調合するということが行われるようになりました。
平安貴族は、調合されたお香を部屋で焚くだけでなく、衣服や小物に香りをつけて、香りを身にまとっていました。ですので、古典作品を読むと、たびたび香りの話が出てきます。ただし、それがどんな香りなのかを現代人が想像することは難しいので、実際に自分で調合することによって、平安貴族の感覚を追体験してみようというわけです。

調合実習では、天然の草木から採れる伝統的な香料を8種類用いました。基本的な調合方法はレクチャーしますが、具体的な香料の配分は、生徒一人一人が自分の感覚を頼りに決めていきます。和気あいあいとした雰囲気が漂いながらも、みんな熱心に取り組んでいて、それぞれが完成度の高い素敵なお香を作ることが出来ました。



(Inoura)

1月13日、会期の最終日に駆け込みで展覧会「レオ・レオーニと仲間たち」を訪れた。レオ・レオーニ (Leo Lionni 1910-1999) は、日本では絵本『スイミー』の作者として著名だが、絵本以外にも様々な分野で活躍したアーティストである。オペラ歌手の母親や叔父の美術コレクションなど芸術に囲まれた少年時代から、パーキンソン病を患いながら創作を続けた晩年まで、漫画・広告デザイン・油彩画・彫刻・絵本など、レオーニの多彩な仕事を紹介した良い展覧会だった。

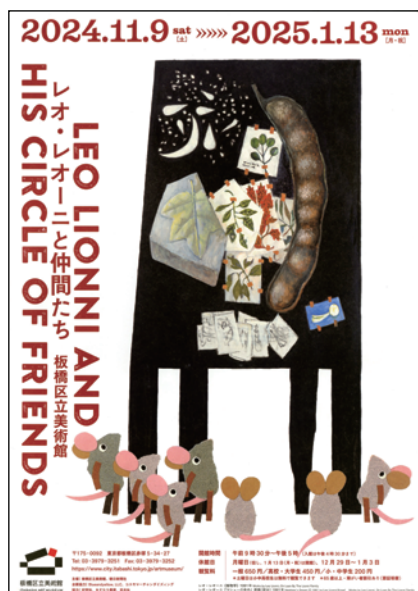
会場は東上線の成増駅から徒歩20分ほどのところにある板橋区立美術館。1979年5月、東京23区で最初の区立美術館として開館。1996年には本人の協力により日本で最初のレオ・レオーニ展を開催している。本人没後も遺族との交流は続き、作品の寄贈も受けた。レオーニの展覧会は2020年に続いて3回目。今回は同時代のアーティストたちとの交流に注目し、20世紀の文化史の大きな流れの中にその仕事を位置づけた。長年の調査研究の成果と言える。

展覧会でまず興味深かったのは、その生涯である。オランダのユダヤ系家庭に生まれたが、父の転勤などで各地を転々とし、ジェノヴァで通った高校で後の妻に出会ったこと、イタリアで就職するも1938年に差別的な人種法が公布され、翌年アメリカに亡命したこと、左派の政治運動に関わり続けたため、そのアメリカでも政府から監視されていたことなど。第五福竜丸事件を描いた連作で知られる画家ベン・シャーン (1898-1969) と親しかったことや、『はらぺこあおむし』の作者エリック・カール (1929-2021) に就職先を斡旋し、絵本の制作を勧めたことなども印象に残った。

そして、その人生経験や思想が作品にいかに反映しているか。紹介されていた、1959年に出版された最初の絵本に人種差別問題とその解決策、目指す世界像を読む解釈には説得力があった。1989年の絵本『どうするティリー?』と、同年に崩壊したベルリンの壁との関係などは分かりやすいが、分断が進んだと言われる21世紀の社会で、レオーニの作品はより一層読まれるべきなのかも知れない。

板橋での展覧会は終わってしまったが、「レオ・レオーニと仲間たち」展は4月以降、愛知の刈谷市美術館など各地を巡回する。一方、板橋区立美術館では、春に「エド・イン・ブラック」と題した展覧会が開催される (3月8日~4月13日、高校生無料)。江戸時代の絵画にみる黒の表現に注目した展覧会だという。江戸絵画は絵本と並んで板橋の得意分野の一つ。期待したい。

(Hara)



【冬の句】

黄落の静寂を踏む影伸びて

雑賀蒼太郎

鳥の声響く枯野に一人居り

北和真

日向ぼこ互い見つめる我と空

小泉友隆

黄落の台風の目にただ一人

篠原陽

我が恋の冷めると共に銀杏散る

近藤源樹

冬田風土の匂いを連れ戻す

日下部仁一朗

乾く土霜まだ降りぬ野球場

高屋柊真

靴裏の落ち葉をはがす神無月

吉岡珠佑

空つ風唇の水奪い去る

山本航太郎

冬の月凍てつく水面を照らし出す

杉本龍太郎

Haiku

(Maekita)

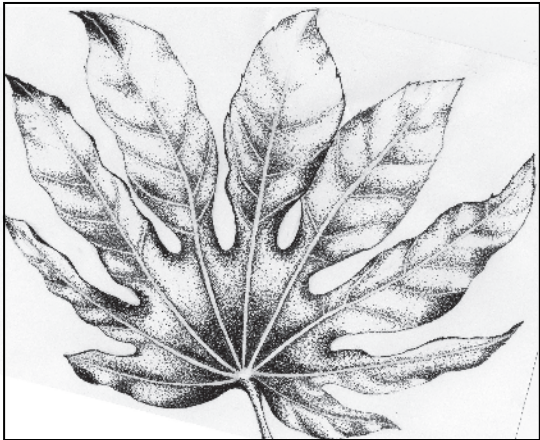
『ヤツデ』. 植物を覚えることが苦手でもこの植物は大抵記憶に残る. 掌状に7〜9裂する葉が特徴的なためだが、この時期であれば球状にまとまった小花が咲いている.「八つ手の花（花八手）」は11月の季語でもある〔出典：俳句の花(創元社)〕. 古来、葉を刻んで天日干しにしたものは咳止めに用いられた. 葉や根にサポニンを含む毒草でもある〔出典：原色牧野和漢薬草大図鑑(北隆館)〕. 本校では、日当たりの悪い林縁によく見かける. 冬でも葉を落とさない常緑樹であるため、この時期は一層わかりやすい.

[2024年10月～2025年1月までの開花情報]

Grass

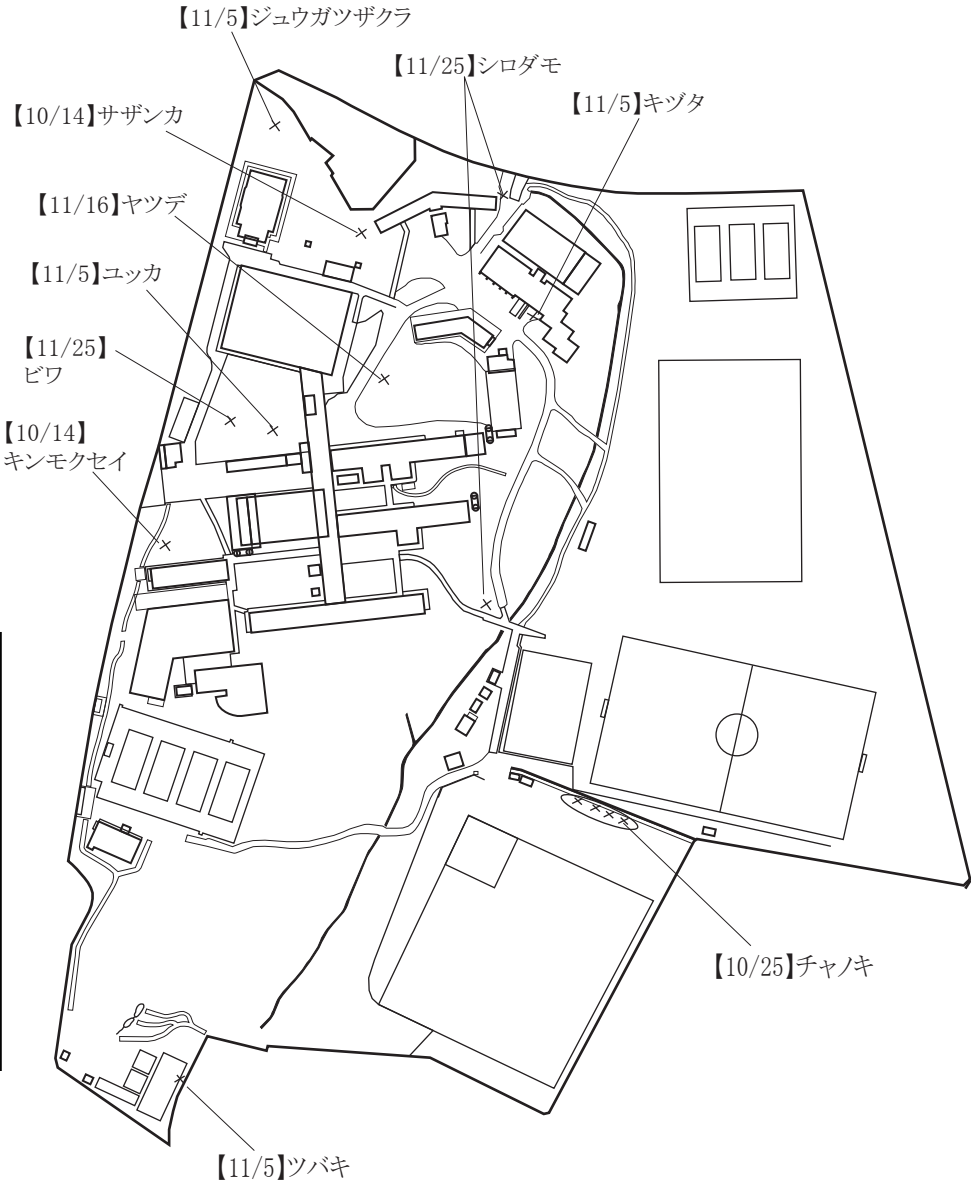
- 14.Oct チカラシバ, セイバンモロコシ, セイタカアワダチソウ,
- 25.Oct ホトギス
- 5.Nov ツワブキ
- 5.Jan ニホンズイセン
- 15.Jan ムラサキカタバミ, ホトケノザ

【ヤツデ】
ウコギ科ヤツデ属



(Aamaki)

Wood



(Miyahashi)

この限られた紙面では、名前の出ている植物や動物がどのようなものであるかをお示しする事は不可能です。名前を手がかりにぜひ図書館などで一度調べてみてください。

執筆・担当区分	天文・気象	樋口 聡 (Higuchi)
	歴史・美術 (博物館)	原 浩史 (Hara)
	俳句	前北 馨 (Maekita)
	日本文化 (香道)	井之浦 茉里 (Inoura)
	日本文化 (茶道)	池田 卓也 (Ikeda)
	植物・地質 他[&発行責任]	宮橋 裕司 (Miyahashi)
	植物画・編集	荒巻 知子 (Aramaki)